

# 令和 2 年度 学校評価結果報告書

兵庫県立姫路特別支援学校

## 1 令和 2 年度を振り返り

新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言下における臨時休校で、令和 2 年度の学校がスタートした。臨時休業中は、クラウドサービスを活用した在宅学習支援の取組が進み、これに呼応するように GIGA スクール構想による校内ネットワーク回線の高速化や電子黒板、児童生徒一人に 1 台のタブレット端末等の整備が怒涛の如く進んだ。学校再開が決定してからも分散登校、スクールバス増車など学校が日常に戻るまでには、多くの時間と工夫を要した。このような中、学校評価目標の設定方法を従前のスタイルからあらため、このコロナ禍の状況下でできることと視点を絞り、具体的に達成できる目標に切り替えて設定した。

いったん落ち着き始め、日常の学校に戻る気配もあったが、また新たに緊急事態宣言が発出された。日本中で「新しい生活様式」が叫ばれるようになり、学校においても生活、行事、授業等の新しい形が、今後の新しい日常にもなろうかとしている。コロナ禍での制約された取組の多い 1 年ではあったが、学校評価のアンケートの分析結果からも今後につながる新しい発見も数多くあった。本年度の目標に対する取組の反省とともに今後に改善すべき点や一層展開を期待する点を以下にまとめる。

## 2 学校評価目標アンケート結果について

本年度、校務分掌を新しく 6 分掌に再編し、効率の良い学校経営と各分掌内で、中堅や若手教員の活躍機会の創造を模索した。コロナ禍において、新しい分掌として具体的に実現に向け取り組むことと題し目標を設定した。(重点目標と具体的な取組内容については学校評価結果報告を参照)ここでは、各校務分掌のアンケートと結果分析ならびに今後の改善方針についてまとめている。

### (1) 教職員アンケート

#### ①総務管理部

今年度、コロナ禍において PTA 全体として動く活動が実施できなかった。したがって PTA 活動について”評価することもできない”ということで評価が低いと思われる。次年度においても、学校に集合し活動することは難しい。形を新しく積極的な活動になるよう検討を進めたい。

校外への情報発信については、メール配信や学年通信については、回数も多く、概ね高評価を得ている。しかしながら、ホームページの更新及び G suite の活用は、今後の課題となる。積極的な活用を検討していきたい。

#### ②教務情報部

在宅学習支援については概ねの高評価が、教職員と保護者ともに一致した結果を得られている。保護者の意見には、重度であるお子さんには使えなかったという声もあった。動画の内容を繰り返し活用できる学びの動画に発展させる必要性を感じている。

質問内容がキャリア教育の実施であれば、概ねの評価を得たであろうが、今回は、キャリア発達段階表を意識した授業を目標としていたため"よくできた"という評価が10%にとどまっていると思われる。小中高一貫した教育活動のためにもキャリア発達段階表の活用意識が今後の課題となる。

### ③生徒指導部

生徒指導上の学校・家庭連携については、連絡帳や懇談等での保護者と連携が評価され、教職員と保護者ともに評価は、概ね達成の領域である。しかしながら評価ポイントに若干の差がみられる。(保護者の評価が若干低い) 今後一層の意識を高め、保護者との連携を深めたい。

また予防的生徒指導として、自立活動の視点で子どもの持っている課題を明確にして、自立支援部とも協力しながらふさわしい支援方法を考え指導することを目標にしていきたい。

### ④進路指導部

進路指導の情報提供について、高等部の評価が肯定的であることは理解できるが、注目すべきは、中学部が高評価である点である。進路指導部からの保護者への進路説明会(本校高等部の進路指導の概要、分教室や高等特別支援学校との違い、卒業後の生活の仕方など)を実施した効果であろうと推察できる。今後とも、進路の情報発信を密としキャリアガイダンス機能(個々の家庭に情報提供)の構造化を進めたい。

### ⑤自立支援部

教職員研修については、“ややできている”という評価が圧倒的で、“よくできた”とする評価は全体の1割程度であった。今年度、「希望する研修を行う…」に重点をおき、研修内容の希望を募り実施したにもかかわらず、このような結果になったのは何故なのかを検証し、次年度につなげたい。分教室とルルド訪問学級においては、コロナ禍において本校で実施の研修に参加しにくかったということもあり評価が低くなっている。今後、参加方法の検討が必要である。

ICT機器活用の学校間交流では、全体的には“ややできていない”という評価であったが、小学部や中学部の居住地校交流や高等部の飾磨高校との交流等では、タブレット端末、電子黒板、Google Meetを活用したオンライン交流が積極的に実施されていた。その情報発信が校内で不足していたのではないかと反省する。またオンライン交流は、本校において離れて位置する分教室や訪問学級との交流を深めるためにも有効な手段であると認識された。次年度、本格的に校内交流を発展させていきたい。

校区内学校園所への地域支援の活動は、コロナ禍であっても充実していたが、職員の評価では、“わからない”という評価が全体の3割を超えている。これは、地域支援の現状を校内に周知できていなかったのが要因と考えられる。学校外での活動内容を校内職員にどう周知していくか工夫が求められる。

### ⑥保健安全部

新型コロナウイルス感染拡大防止や児童生徒、保護者、教職員の健康管理に関する危機的意識の向上を図る取組は、教職員・保護者ともに概ねの高評価を得ている。全職員の気持ちを合わせて取り組んだ結果であろう。

校内の防災体制の整備・充実は“ややできた”という評価である。防災訓練は、今年度、

においては、感染対策として分散型、動画を使っでの訓練を実施した。あわせて防災マニュアルの見直しも進んだ。しかしながら地域の避難場所としての地域連携の推進は、“できている”という評価が、全体の3割にも満たず、4割の教職員が“わからない”という評価であった。今後、災害時に地域とどのような連携を図らなければならないのか検証を進めていく必要がある。

## ⑦校務運営

働き方改革推進に向けて、教職員の働く環境を改善するために行った各種様式のデータ化、マニュアル化の推進は、“ややできた”という評価にとどまっている。業務の効率化をできることから着実に進めていかなければならない。

県ファイルサーバーの活用・整理と校内ファイルサーバーの増設整備等は進んだが、その中身の整理は進んでいない。特に仮想デスクトップの活用方法については全くの手付かずのままである。今後の課題として急務である。

今年度新しく再編された校務分掌は、一年かけてその流れを模索したが、“ややできた”以下が全体の9割であり、“できた”という評価は1割に達していない。今後一層に業務内容の整理を進める必要がある。

## (2) 保護者アンケート

今年度は、コロナ禍で来校する機会も少なかったため“評価できない”という意見がアンケート全体の中で多くみられた。例年であれば、どの項目に対してもAの“よくできている”という評価が多くを占めるが、本年度は、Bの“ややできている”という評価が半数という結果になっている。なかでもPTA活動の評価に関しては、ほとんど参加ができなかったということでCの“ややできていない”という評価にとどまっている。

また今回のアンケートは、初めて一斉メールシステムのアンケート機能を活用して行った。非常に高い回答率を得ている。そのため、例年になく多くの記述形式のコメントをいただいている。新型コロナウイルス感染症にまつわる取組に対して学校に対する感謝の言葉も多くいただいた。一方で、今後の課題となる言葉も多数いただき参考にしていきたいところである。学校の設備に関しては、普段から感じられていることが言葉にあらわれていた。できる箇所から少しずつ改善していきたい。

## 3 学校関係者評価について

学校評議員の皆様からもコロナ禍において働き方の変化の報告がされた。企業においては、ICT技術を使っでの在宅勤務が一気に進み、オンラインの会議が全体の半数以上を占めるようになったという報告があった。保護者からもPTAの会合がオンラインとなることによって、障害のある子どもがいるので子どもが学校から帰ってくる時間までに帰宅できるのかなどの不安から解消されたという声も聞かれた。コロナ禍でこれまで当たり前としていた固定観念が変わり、自粛の中で進んでいったことも多い。みんなが顔を合わせるのが常識だったが、その必要がない場合もあるということとをどこの機関も感じ取ったようだ。

新型コロナウイルス感染症が収まっても効率化という意味でリモートで行うことは大切にしてほしいという意見があると同時に、一方では、顔を合わせていたら「うんうん」でその場で確認できていたことが、オンラインではしづらく、またアイデアを出す、協議をするという感じはなくなってきていて、伝達的な会議になりつつある等の今後の課題も示

唆された。

防災訓練については、①自分の命は自分で守ること、②どこに逃げるか一人一人に徹底していくこと、③自分で判断して逃げることを特に大事にして教える必要があると今後に向けて貴重なご意見をいただいた。

福祉機関からは、明文化されないマナーを障害者にいかに伝えていくかがとても大事だと思っており、公共交通機関を使う利用者にマスクをつけさせるにはどうしたらよいか、学校ではどう対応しているのかと質問された。学校からは、車内マナーについては、電車やバス会社が出しているマナーの項目やイラストを使って自力通学生に指導していることや SST をつかってこの場面ではどういう言葉を使うとよいか、相手に自分の要望を伝えるときの言葉などをイラスト入りの資料を作成して使い、自立活動の「人間関係の形成」領域と組み合わせて指導していると回答し、お互いに難しい課題であると意見交換が進んだ。

その他にも、コロナ禍において、学校ではどのような研修のニーズが多かったのかという質問があった。自立支援部からは、性教育、卒業後の進路、オンライン授業の作り方、電子黒板の使い方等が多かったと報告があった。①自閉症の子どもたちにとっては視覚支援が不可欠なので、電子黒板が有効であることは周知されていること。②事前に資料を作成するとすぐに提示でき、言葉よりもリアルなもので授業できること。③授業の様子をすぐ後で見ても自分自身を振り返ることができるなど様々な利点あること など、電子黒板とタブレット端末の導入による今後の学校教育の姿を伝えることができた。

#### 4 まとめ

学校としての危機管理を常に問われ続ける 1 年であった。保健のマニュアルは、常に改定していたものの、コロナに関する状態は日々変わっていき、その都度の判断（限られた時間での判断、どのように説明するか等）が重要であった。

コロナ禍でも災害は待ってくれない。本校は、避難所指定を受けており、福祉避難所にもなっている。毛布などの防災グッズ以外にも姫路市からコロナにかかわる防災グッズが送られてきた。地域防災の検討も早急に対策を講じなければいけない。

コロナの影響で変わらざるを得ない面が多かったが、マイナスばかりではない。国の GIGA スクール構想で電子黒板・タブレットが入り、Wi-Fi 環境が整備され、オンラインによる交流も加速度的に進んだ。居住地交流、学校間交流についてもオンラインで事前につながることで顔見知りになり、今度、直接会うことを楽しみにしているという声も聞いている。直接とオンラインとが比較される場面が多いが、ツールを生かすにはベースが必要である。子どもたちが来てこそその学校であり、オンラインは補助的であるという認識が必要ではないだろうか。今までの直接的な活動にオンラインが置き換わるのではなく、直接的な活動をオンラインがサポートすることでより深みのある活動になると信じている。

今年度、多くの行事が中止となったが、学校で 1 日をしっかりと過ごすことがとても貴重だと気付かされた。日々の授業の大切さを改めて実感することができた。新型コロナウイルス感染症は、当たり前である日常を奪っていったが、そこで新たに学んだ教訓を生かし、次のステージに向けステップアップしなければならない。この機会を教育現場に吹いてきた新たな風ととらえ、追い風で本校教育の進化を期待したい。

# I 令和2年度 学校評価結果(報告)

	分野	①重点目標	②具体的取り組み内容	教職員 評価	保護者 評価	今年度の取組状況	改善方策
総務 管理部	家庭・地域との連携	保護者、関係諸機関、福祉事業所、地域等に情報を発信し、連携を図る。	①学校HP、メール配信、電話、毎日の連絡ノート等の更なる活用。 ②学校行事やオープンスクール等の公開。	3.30 B	3.03 B	校内・保護者への情報発信については、メール配信や学年だより、連絡帳で、今年度については、回数も多く概ね高評価を得ている。しかしながら、ホームページの更新はできていないことから校外地域への情報発信の不足が指摘されている。	地域への情報発信等、アンケートでいただいたコメントに、できるだけ対応していきたい。また本年度途中から導入されたGsuite等は、家庭との連携に有効であるが、本年度は、まだ準備段階にとどまっている。今後の課題となる。積極的な活用を検討していきたい。
	PTA活動	PTA活動の精選と充実を図る。	①PTA理事会の報告、PTA開催行事の案内等の充実。 ②SNSを利用した「新しい参加協力」についての模索、検討。	2.49 B	2.00 C	今年度、コロナ渦においてPTA全体として動く活動が実施できなかった。したがってPTA活動について“評価することもできない”ということで評価が低いと思われる。	令和3年度もコロナの影響や大規模な改修工事のため、PTA主催の行事の中止が決定している。学校に集合し活動することは難しい中で、形を新しく積極的な活動になるよう検討を進めたい。必要に応じて本部役員会の活動内容は、報告を密にしたいと考えている。
教務 情報部	学習指導	ICT機器を活用した授業展開① 家庭学習の充実 学習動画・学習教材の配信 (メールやクラウドの活用)	新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う臨時休業期間中、家庭学習の充実を目的として、各学部・学年ごとに学習動画や教材を作成し、メールやクラウドを活用して配信。 ご家庭からも学習成果等をメールで返信いただくことで、双方向の学習環境を整える。	3.23 B	2.95 B	在宅での学習支援の概ねできたのではないかと評価が、教職員と保護者ともに一致した結果を得られている。しかしながら一部の児童生徒には難しく使えなかったという意見も見られた。在宅学習支援に用いたClassiは、今後Gsuiteに引き継がれることになる。現在準備段階である。	在宅学習支援の動画を繰り返しの学習に活用できるような「学びの動画」への展開を期待するところである。高等部ではiPadを週末家庭に持ち帰らせているので、家庭でもICT機器が活用され卒業後につながるように工夫していきたい。
		ICT機器を活用した授業展開② 電子黒板を活用した授業展開	2学期から全教室に電子黒板(大型モニター)が導入されることに伴い、従来の黒板・チョークを使った授業からパワーポイント等を活用した授業へ変更。 ※大きな文字やイラスト写真を活用したスライドの作成活用により、より分かりやすい授業展開を工夫する。			電子黒板の操作や、授業活用について研修会を開き計画的に取り組んだ。多くの教室で電子黒板の活用がみられるようになってきている。学びのイノベーション事業において児童生徒一人に一台の端末は、整備が本年度をかけて順次進んできたが、準備に手間取り、児童生徒への活用までには至っていない。	主体的に児童生徒が調べ考え意見を交換し合える深い学びを目指したい。ICT機器(iPad)の活用を授業の中に取り入れていけるように研修等を計画的に実施するとともに、良い事例があれば積極的に公開できるようにグループウェア等を活用していきたいと考える。
	教育課程等	キャリア発達段階表に基づく系統的な学習内容の充実	キャリア発達段階表を意識した授業内容の充実 (PDCAサイクルによる改善)	2.92 B		質問内容がキャリア教育の実施であれば、概ねの評価を得たであろうが、キャリア発達段階表の意識した授業については、よくできたという評価が10%にとどまった。キャリア発達段階表の意識が今後の課題となる。今年度、キャリア発達段階表の見直しを始めることができた。	本年度、「個別検討プロジェクトチーム」が、「キャリア発達段階表」の見直しを進めている。今後、現教職員の意見を今一度集結し、小中高一貫した教育活動目指し、「キャリア発達段階表」の活用意識が定着するように取り組みたい。
生徒 指導部	生活指導	決まりやルールを守り集団に適應する力を伸長させる。	①家庭・学校・社会のルールを理解させる。 ②家庭と連絡を密にして児童生徒の理解を深め適切な指導を行う。	3.40 B	3.21 B	生徒指導については、連絡帳や懇談等での保護者と連携が評価され、学校・家庭連携について、教職員と保護者ともに評価は、概ね達成の領域である。しかしながら評価ポイントに若干の差がみられる。(保護者の評価が若干低い)今後一層の意識を高め、保護者との連携を深めたい。	予防的生徒指導の発想を自立活動の取り組みに生かし、ルールを守ること・集団に適應することについて児童生徒の課題を明確にして、適切で効果的な指導を家庭・学校双方で実施したい。自立支援部をはじめ他部・他の機関と連携を取り、児童生徒にふさわしい支援方法を考えて指導する。指導には視覚教材等を活用し、児童生徒にルールや明文化されないマナーなどの内容や意義をわかりやすく指導する。
進路 指導部	進路指導	1. 主体的に選択・決定できる情報提供体制の充実 2. 「働く意欲」や「働く力」を培うキャリア教育の支援の促進 3. 情報の収集能力・活用能力の育成	①進路指導部主催による進路懇談の開催。 ②地域資源の活用した体験を中心とした取り組みを早期から行う。 ③ICT機器の利用による情報収集をおこなう。	2.76 B	3.04 B	進路指導の情報提供について、高等部の評価が肯定的であることは理解できるが、注目すべきは、中学部が高評価である点である。進路指導部長からの保護者への進路説明会(本校高等部の進路 指導の概要、分教室や高等特別支援学校との違い、卒業後の生活の仕方など)を実施した効果であろうかと推察できる。今後とも、進路の情報発信を密としキャリアガイダンス機能の構造化を進めたい。	新型コロナ感染症対応のため実施ができなかった全体会形式の進路の情報提供を今後個別の情報提供の形態も併用するように変更していく。本年1学年から始めた進路個別懇談を他学年にも拡大していく。早期からの情報提供が好評だったのでを受けて中学部・小学部の生徒・保護者・教員へのより積極的な情報提供を行っていく。他校務部と協力することで円滑な情報提供の体系を確立していく。
自立 支援部	自立活動	1. 自立活動の時間における指導と各教科等との密接な関連 2. 児童生徒の実態把握と自立活動に関する個々の課題の明確化	①自立活動の時間における指導とキャリア教育との関連をわかりやすくまとめる。 ②自立活動の時間の指導のための個々の児童生徒の実態把握と具体的目標の設定。	3.22 B	3.00 B	自立活動を通しての専門的な指導がおおむね達成できているという評価であるが、学部によって取り組みの達成感に違いが表れている。別でとったアンケートでは、小中学部は自立活動の般化の意識は100%できていたので、意識はしているが、密接な関連と問われるとまだ十分でないのかもしれない。	自立活動と生活単元との関連シートを作成した。自立活動とキャリア教育との関連シートについては、現在全教員の意見を取り入れながら作成中である。個々の児童生徒の実態把握については、各学部工夫してチェックシート等を用いて行い、複数名で検討し、適切な目標を設定するようにしている。
	教職員の専門性	1. 専門性向上に役立つ校内研修の推進 2. 研修成果の共有と還元。特にICT教育に関する専門性を向上する。	①教職員のニーズに基づいた研修を改計画、実施する。 ②研修の成果や意見、感想などを見える形で掲示する。	2.90 B		今年度研修方式を変え、職員の希望優先でテーマを設定し、9回の研修会と4回の事例研修会を開催した。回数的にも十分提供でき、内容的にも何度も職員のニーズを聞いて実施できた。しかしながら研修については、“よくできている”という評価は全体の1割程度であった。	今年度は、希望に応じた自主研修を充実させた。研修を受ける人が偏る傾向があった。改善していききたい。事例検討会などでは、共通理解を図るため、学年全体が参加して研修を受けるなどの効果があった。今後短時間でも学年、学部全員が参加する研修会も企画し共通理解を図っていききたい。
	交流及び共同学習	1. 他校との交流及び共同学習の充実 2. 学部間交流	①ICTを取り入れた間接交流も行いながら、他校児童生徒の理解啓発を図っていく。 ②校内の児童生徒がお互いの存在に気づき、認め合う。	2.74 B	2.89 B	ICT機器活用の学校間交流では、全体的にはB評価”ややできている”という評価であったが、小学部中学部の居住地校交流や高等部1年生の飾磨高校との交流等では、iPad、電子黒板、GoogleMeetを活用したオンライン交流が実施されていた。その効果が確認されている。	学部間交流は、本校学部ではB評価であるが、ルルドと分教室は”ややできていない”のC評価であった。今後、場所を離れてもできるオンライン交流など積極的に取り入れていきたい。
	センター的機能	1. 地域の学校園所への巡回等を通して地域の特別支援教育体制を充実させる。 2. 教育相談の充実	①地域の学校園所への巡回等を通して地域の特別支援教育体制を充実させる。 ②教育相談来校者対象に、本校の紹介をわかりやすくするためにパワーポイントの資料を充実させる。	2.85 B		地域支援の活動や本校紹介資料などコロナ禍であっても充実していたが、職員の評価では、わからないという評価が3割を超えている。これは、地域支援の現状を周知できていなかったのが要因と考えられる。	地域支援の様子を校内職員に紹介する機会が少なかった。今後、定期的に相談件数や地域支援件数等について校内の職員に発信、周知する機会を持つ。ホームページや校内グループウェアの活用も検討していきたい。
	個別支援	1. 個別の教育支援計画による学年、学部の移行支援、情報交換の充実 2. 支援会議・拡大支援会議による共通理解と支援方法の検討	①個別の教育支援計画の様式の見直しと校内での統一によりより効果的な引継ぎができるようにする。 ②校内・校外の関係者が共通理解した上で協同しながら指導・支援を行なう。	2.99 B		個別の教育支援計画は、各学部での見直しを検討を進めてきたが、その柱となるキャリア発達段階表の活用意識は低い(質問10)状況、さらには令和4年度から始まる校務支援システム(県統一の様式が出る予定)の情報が錯綜する中では、教職員のC評価は必然かもしれない。	個別の教育支援計画は学校全体で統一様式にするよう検討中である。学部の移行については、伝える事柄を明文化し、口頭でも引継ぎを丁寧に行っていく。個々の児童生徒に課題が生じたときはその都度、校内支援会議や拡大支援会議等を開き、共通理解し、具体的な解決策を話し合っていく。
			①第2波発生への対応・感染拡大予防のため、学校再開のガイドラインなどで教職員の共通認識を図る。			1.新型コロナウイルス対策の基盤として、まずマニュアルを作成し、教職員の共通理解を図った。 具体的な取り組みは、(1)感染源を絶つ、①登校時の健康状態の把	

保健安全	健康教育 ・ 保健衛生	1. 新型コロナウイルス感染症対策  ②児童、生徒帰宅後教室などの消毒を毎日実施する。 ③健康観察記録表を毎日記入する。 ④学校からの文章やメール配信などで保護者との連携を図る。	3. 46 B	3. 19 B	握・発熱等の風邪症状がある場合は登校しないことの徹底、②第2保健室の設置、③空気除菌を図るため循環式紫外線清浄機を設置、(2)感染経路を絶つ、①手洗い・咳エチケット、②ごみの廃棄の工夫、③清掃・消毒、(3)抵抗力を高める。集団リスクへの対応として、①密閉の回避、②密集の回避、③密接の回避、(4)保護者への感染症対策には、学校のホームページや学校からの文章配布やメール配信より連携を図った。  2. 児童生徒、保護者、教職員の健康管理に対しては、毎日の健康観察や、健康診断、診断結果後の再検査及び教職員のストレスチェックに対して、学校ホームページの活用や児童生徒への文章配布、グループウェアなどで教職員の共通認識を図った。	1. 新型コロナウイルス感染拡大を防ぐための取組や予防に関する危機意識の取組は、おおむね高評価を得ている。今後も継続し感染症対策が必要である。さらに、専門機関との連携を深め、児童生徒・教職員のメンタル面等への配慮へも取り組んでいく必要がある。  2. ①健康診断の受診率は、ほぼ達成、②健康診断後の再受診率は、約3割、教職員のストレスチェックの実施は約7割であった。今後も継続して保護者への文章配布、児童生徒への保健だより、教職員へやグループウェアなどを活用し健康管理に対する意識向上を検討する。
	安全管理 ・ 安全教育	1. 地震防災訓練や防災マニュアル等による学校防災体制の整備・充実  ①火災、洪水、地震、不審者対応、避難訓練を実施する。 ②避難訓練に係る学習コンテンツの充実を図る。 ③防災マニュアルを作成する。  2. 「命を守るための行動」初期対応の徹底と地域連携  ①避難所マニュアルを作成する。 ②地域の避難場所及び対応教職員の確認をする。	2. 80 B	3. 07 B	1. 防災マニュアルの改訂及びオンライン授業にて防災マニュアルの項目を新設して活用した。防災訓練は、①火災、②水害、③南海トラフ訓練、④地震について実施し、コロナ禍での感染症対策を含み実施につなげた。学校の防災体制として、消防署の職員より指導をもらい改善につなげた。  2. 緊急時児童生徒及び教職員の確認表を作成し訓練実施時に活用した。また、地域避難場所の生徒名簿一覧表も作成した。しかし、姫路市と連携しながら地域避難場所としての具体的な取り組みはコロナ禍でもあり不十分であった。	1. 防災訓練実施後の教職員アンケート結果より、ほぼ教職員の防災意識の向上と災害時の避難行動を身につけられている。引き続き防災訓練の継続と、①コロナ禍での対応、②プライバシーへの配慮等の工夫、③消防署との連携が必要である。  2. 地域避難場所の生徒名簿一覧表を活用し、次年度は、地域で対応できる教職員の避難場所対応の具体的な取り組みが必要である。また、本校が地域の避難場所になっているため、備蓄の保管や姫路市とのさらなる協力連携が必要である。
校務運営	組織運営	1. 業務の効率化を図る。  2. 不測の事態(新型コロナウイルス感染症)に対し、校務運営委員会メンバーを中心に組織(チーム)として対応する。  ①各種様式のデータ化、マニュアル化を推進する。 ②共有フォルダの整理をする。 ③各校務部に該当する事案を分担し、対応策について考え、校務運営委員会で吟味、職員会議で職員に周知徹底する。	2. 79 B		①県ファイルサーバー内に、R212 各種書類、様式を作成。旅行命令、物品要求、ヒヤリハット報告書等、21の様式を整理することができた。②県ファイルサーバーの構成は、20のフォルダ構成で安定した運用ができるようになった。仮想デスクトップについては、見直しと今後の方向性を模索するにとどまった。③今年度新しく再編された校務分掌は、一年かけてその流れを模索したが、”よくできている”という評価は1割に満たない。今後一層に業務内容の整理を進める必要がある。	現在、電子ファイル様式をそろえることはできたが、紙様式と混在する状況である。今後、紙様式の整理を進めていく。仮想デスクトップは、情報セキュリティ情報資産の取り扱い要綱の作成と同時進行で、今後その整理を進める。校務分掌は、今年度再編の6分掌の下部組織として、課と班を構成し、業務の細分化、責任の分化をはかり、中堅、若手の育成を図る。働き方改革を、グループウェアやクラウドサービスの活用を取り入れながら、情報活用分野からのアプローチを展開する。